教室を越えたライティング指導

――エッセイコンテストを活用して

小林正人

はじめに

新学習指導要領が出され，それに基づいた教科書がそれぞれの学校で採択されている。「ライティング」の新教科書は，文法シラバス中心の現行教科書とは違い，さまざまな面で工夫がされている。しかし，現実として週２時間の授業でその教科書を使用して効果的なライティング指導ができるかというと不安が残る。

新学習指導要領では，「ライティング」の目標を次のように掲げている。

「情報や考えなどを，場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすとともに，この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。」

単に言語材料の学習だけにとどめず，情報や自分の考えを伝えるために場面や目的に応じて，読み手を意識させたライティング指導を目指そうとすれば，本来の授業だけでの指導ではほとんど不可能であろう。そのためには授業だけではなく，教室を越えた他の手段をも活用し，さまざまなライティング活動の場面を教師が工夫し，提供していく必要がある。

しかし，ライティング能力は短期間に身につくものではない。英語の他の３つの能力とともにバランスよく伸ばしていくためには，どのように系統立ててライティング指導を行っていけばいいのだろうか。

コンテストを活用したライティング指導

本校では兵庫県高等学校教育研究会英語部会が実施している「高校生英文エッセーコンテスト」（平成10年度より実施）へ，学年生徒全員に課題という形で応募・参加させ，ライティング指導に活用している。当コンテストは２つの部（１年の部，２・３・４年の部）から成り，次のような形式で実施されている。

○１次審査

タイトル（「What do I study for?」など）が与えられ，350～400語で英文エッセイを書き，原稿郵送で応募する。各学校各部５名まで応募できる。

○２次審査

１次審査で各部20名選ばれた生徒は，２次審査会場で次のような課題を当日与えられ，２時間でエッセイを書き上げる。ただし，英和・和英辞書は持ち込むことができる。

２次課題例（14年度１年の部）

Imagine that you have a time machine. If you use a time machine, you can go to any place or time. For example, you can move to the past, and can change your life or even world history. What will you do with your time machine?

毎年６月末に当コンテストの実施要綱が発表されるので，本校では夏休み前の課題として，全員にコンテスト指定のタイトルでエッセイを課す。語数は150～200語に減らしハードルを低くすることで生徒の書く意欲を下げないように工夫している。またこの程度に語数を減らしても校内選考の基準としてのエッセイの内容やライティング能力

も十分判断できるし，選考された生徒がコンテスト用の語数に膨らませて書き直す場合でもそれほど大きな労力を必要としないと考えている。

できれば，実際にエッセイを書き始める前に「パラグラフ・ライティング」など，文の構成や展開の基本についての意識付けができれば，より質の高い作品が期待できる。このような事前指導やコンテスト終了後の優秀作品を読ませる事後指導が，生徒のライティング活動への大きな動機付けとなるものと考えている。

１次審査に向けて全生徒にまとまった英文エッセイを書かせることで，英和・和英辞典を使い，仮に間違った英語であっても，なんとか自分の考えを書こうとする姿勢を育てる。また，ALT によるチェック（訂正やコメント）により自分の書いた英語を見直し，表現のバリエーションを広げることができる。

さらに，全員ではないが，選考された生徒にはコンテストで要求される語数の英文を膨らませ，エッセイの主題をより読み手に強調するために，自分の経験談を付け加えたりすることでエッセイの構成・展開を再度見直していく過程を踏ませていく。こういう活動を通して，生徒自らが読み手を意識した効果的な書き方を次第に身につけていくことになる。

生徒は単に校内での課題としてだけではなく，全県の高校生が参加するコンテストに応募する作品を仕上げるという意味で，普段よりよい意味での緊張感を持って書くことができる。また，コンテストを実施する側から見ても，参加者の裾野を広げ，コンテストのレベルアップを図ることもできる。

次にあげるのは当コンテストの受賞生徒による「英文エッセイの書き方」についてのコメントであるが，高校生の英語を書く際の姿勢や工夫がよくわかり，ライティングを指導する者として大いに参考にすべきだと考えている。

私が英文エッセーを書く時に心がけている事は，主題を明確にさせるということです。そのために，自分の最も伝えたいことをまず文頭に置き，次に具体例などを用いながら主題を膨らませるようにしています。また，日本語で作文を書くときによく用いる，婉曲的な表現をそのまま英語に訳すと，読み返したときに意味が通じない場合がしばしばあるので，私は英文エッセーを書く時は最初から英語で書くようにしています。簡単な英文でもいいから，文全体が一貫した流れを持つように心がけています。日本語であれ英語であれ，エッセーを書くときに大切なのは，日ごろからいろいろな物に感動したり，深い考えや疑問を持つことだと思うので，多くのことに関心を持ち，さまざまな分野に視野を広げ，日ごろの自分の感情を大切にしていきたいと思っています。　（２年生　生徒）

当コンテスト実施要領や受賞作品をコンテストホームページ（http://hyogo-english.net/）に掲載しているので，アクセスされたい。

おわりに

今，大学入試では従来の「和文英訳」型から「自由英作文」型への出題傾向に変わってきている。特に，国公立大学の二次試験でその傾向が顕著である。高校３年間を通して，思いつきではなく系統立ったライティング指導をしていかなければならない。その１つの柱として，全国レベルのコンテストやそれぞれの都道府県で実施されているコンテストの活用が，学校での指導に波及効果をもたらすものと信じている。

（こばやし　まさと・兵庫県立姫路東高等学校教諭）